

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレーシア・シンガポール関係史

鈴木陽一（下関市立大学経済学部准教授）

マレーシアに暮らしていると、マレーシア人が最も近い国と言えるシンガポールに並々ならぬライバル心を抱いていることに気づかされる。政治、経済などあらゆるところで、シンガポールは気になる存在である。それゆえ、ここでは両国の関係を理解するために、その歴史的な背景について述べたいと思う。今でもマレーシア半島部とシンガポールとの社会的・経済的な面で結びつきは非常に強いけれども、歴史的には両者は一体と言う考えが非常に強かったからである。

まず、指摘したいのは、シンガポールが単独の植民地国家となったのは、イギリス人が旧海峡植民地を解体した 1946 年になってからのことであるという事実である。さらに、このとき、現在のマレーシアの原型もつくられることになった。それまで保護下に置いていた半島イスラム諸邦にペナン、マラッカを加え、クアラルンプールを首都とするマラヤ連合を発足させ、半島部が一つの政体を形成することになったのである。このマラヤ連合は、その 2 年後、マラヤ連邦に改組され、連邦は 1957 年には独立を果たした。イギリスがシンガポールを半島から切り離してわずか 11 年後のことである。その意味で、「イギリスによる分割が両国をとりあえず分け隔ててしまっただけで、本来、両国は一体であるべきである」という感覚をその後に残したのは当然の帰結と言えよう。

今日では忘れられがちとなっているため、強調しておきたいことがある。それはシンガポールをはじめとする海峡植民地が長くマレー文化の中心地であったということである。ウィリアム・ロフによる名著『マレー・ナショナリズムの起源』はシンガポールにおけるマラヨ・ムスリム世界の発展（19 世紀）に始まり、やはり同島における新聞『ウトゥサン・ムラユ』の発刊（1939 年）のころまでの流れを記した書物である。半島はマレー・ナショナリズムのめざした地ではあったが、海峡植民地はその起源であったとも言える。スル

タンたちを戴く半島諸邦では言いづらい旧体制への批判も、イギリス人支配下の海峡植民地では大っぴらに語られていたのである。比較的自由的な雰囲気はその後のシンガポールにおけるマレー文化の開花に繋がった。マレー文学において不動の地位を占める「50 年世代」の名作の多くはシンガポールで書かれたのである。

よく知られているように両者は一度合同の試みを行い、失敗している。1963 年、すでに独立していたマラヤ連邦がイギリス支配下にあったサバ、サラワクと合同してマレーシアを結成するにあたり、シンガポールも加わったのである。分離のとき、シンガポール政府首相リー・クアンユーが記者会見で涙ながらに次のように述べ、途中で会見を打ち切ったのは有名である。

「マレーシアからシンガポールを切り離す協定に署名したときのことを思い出すと、誰もが苦悩のときを噛み締めることになるでしょう。私にとっても苦悩のときです。人生のすべて、成人になってからのすべて、二つの地の融合と統一を信じていたのですから。私たちは地理に拠って、経済に拠って、親族関係に拠って繋がっています」

重要なことを言い当てている会見であった。確かに、分離以降、当時の予想に反し、シンガポールはまったく別の国となった。しかしそれでも隣国は 特にある年齢以上の世代にとって 依然として気になって仕方ない地であり続けてきたのである。

< 筆者紹介 >

長野県生まれ。上智大学外国語学研究科国際関係論専攻博士後期課程満期退学。2004 年 10 月より現職。10 年 4 月から 11 年 3 月までロンドン・スクール・オブ・エコノミクス客員研究員。冷戦期の歴史を英語諸国主導による新世界秩序形成の過程として再構築しようというのがこれまでの研究テーマ。ここ数十年あまり、マレーシア、シンガポールの脱植民地化の研究を行っている。